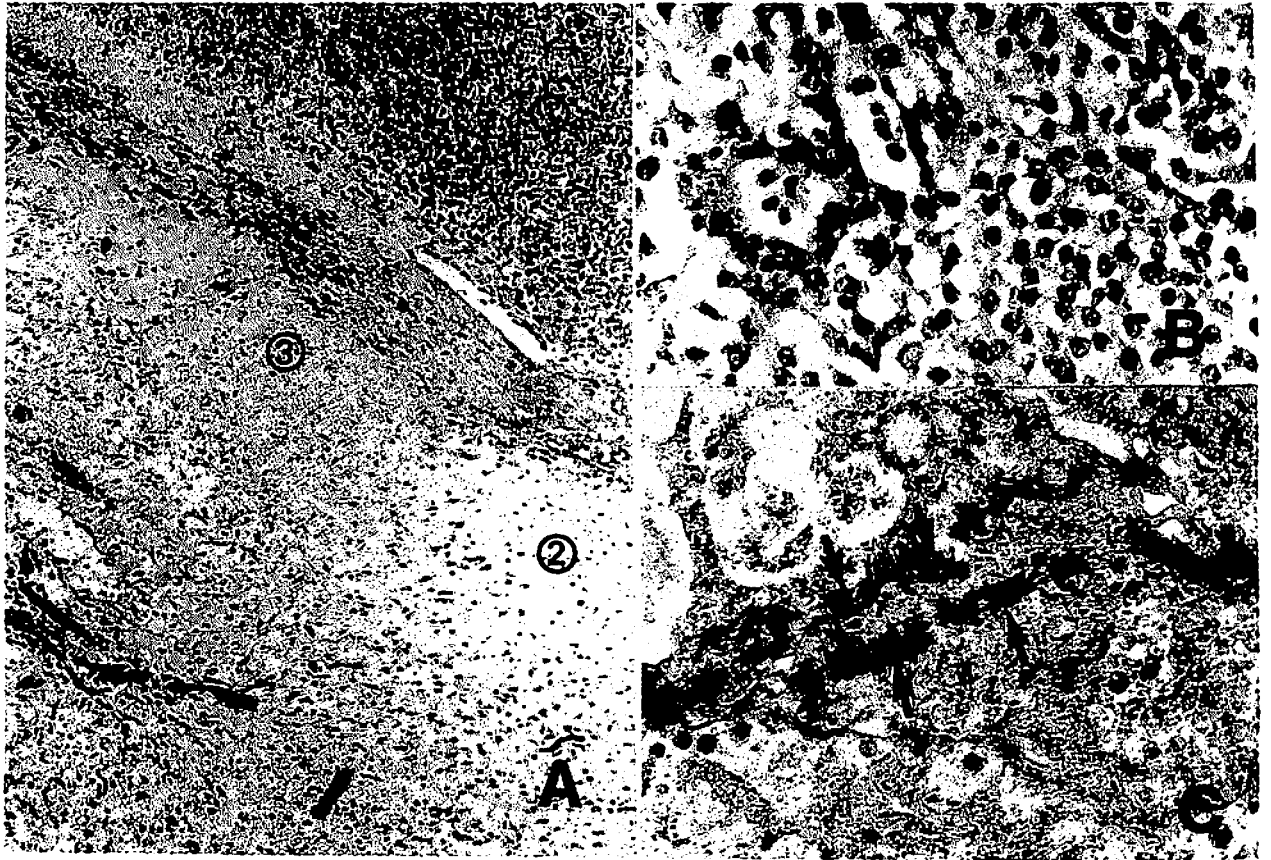


犬の肝

東京大学農学部家畜病理学教室出題 第22回獣医病理学研修会標本No.367



動物：イヌ，ヨークシャーテリア，去勢雌，約8才。
体重3.8kg。

臨床：1980年6月，X線により腹部に腫瘤を認め，11月には肺にも腫瘤がみられた。ピクシリスチン，シクロフォスファマイドなどの制癌剤が投与されたが無効で，12月には右第1乳腺部にも小豆大の腫瘤が認められた。その後改善はなく1981年4月4日安楽死。

剖検：右乳腺部腫瘤は剖検時には大豆大で，腹腔内には血様腹水を約10ml認めた。胸膜・縦隔膜には粟粒大～米粒大の白色結節多数が散在，右肺中・後・副葉に大豆大～ゴルフボール大の腫瘤を数個認め，断面は灰黄色で黄色透明粘稠液または血様液を容れる嚢胞を内部に認めるものもあった。肝は暗褐色，小児頭大に腫大，表面は凹凸不整で，肺と同様大豆大～拳大灰黄色腫瘤が多発し，中心部が自潰，石灰化するものもあった。左腎の約4分の3は，尿を満したゴルフボール大腫瘤によって占められていた。乳腺部腫瘤および脳は採取が許されなかつた。

病理組織学：肝の間質結合組織は増生し，腫瘤には，①円形核をもつ類円形～多形の細胞が密に増殖する部分，②増殖した紡錘形細胞の間隙にアルシアンブルー陽性粘液様物質を認める部分，③膠原線維が多く線維腫様を呈する部分が混在し，相互移行像も観察された（写真A，H-E，×60）。①では腺管状構造がしばしば認められ（写真B，H-E，×400），②では嚢胞の形成，③では一部に類骨形成が認められた。電顕観察では①の腫瘍細胞間に明瞭なデスモゾーム（写真C矢印，×12,000）と毛細胆管様構造があり，明らかに上皮性の性格を有していた。また，③の腫瘍細胞周囲には多量の膠原線維と基底膜様構造がみられた。肺・腎の腫瘍についても同様の光顕・電顕所見が得られたが，①の腺管状構造は肝におけるよりも明瞭でかつ頻度が高かった。

以上の所見は，ヒト肝における胎性期の性格の強い腫瘍と類似しており，「肝混合腫瘍」と診断された。